客船よもやまばなし

＜連載㉘＞

イラスト本「船ができるまで」

大阪府立大学船舶工学科助教授
池　田　良　穂

この7月に 偕成社という本屋さんから一冊の本を出した。題名は「船ができるまで」で，「豪華客船ふじ丸」という副題がついている。偕成社は，特に児童書を得意とする出版社で大変良心的な本作りをしていることで定評のある会社である。この会社の，編集部長をしていた高森氏が，1隻の客船が建造されていく過程を一般の人々にわかりやすく理解してもらえるような本を作りたいと思ったことが，この本が生まれることになった発端であった。高森氏は，船に関しては全くの素人である。彼は，ふじ丸が建造されることとなっていた三菱重工業の神戸造船所と船主の商船三井にこの話を持ち掛けた。そして，三菱の神戸造船所を通して筆者にこの本作りの依頼がきた。今から，1年半ほど前のことであった。

この依頼を 聞いて，筆者も引き受けるのを若干躊躇した。それは，子供向きの本など書いた経験もなかったし，大学にずっといる筆者には造船所での実務の細部についての知識もそれほどなかったためである。しかし，高森氏に会い，非常にまじめな編集姿勢と，本作りへの情熱に接し，ついに引き受けることに決心した。また，この決心には，永年の造船不況の中ですっかり人気を無くした造船業を，今からの世代である子供たちに知ってもらい，夢のある産業へと変身させていくための，多少のお役にたてるのではないか，という気持ちも大きな要因であった。筆者は現在，大学の船舶工学科で教鞭をとっているが，最近の学生の造船業離れは激しく，卒業生の1割程度が造船業に行くだけである。最近卒業していく連中は，小学校の頃から，マスコミを通じて「造船不況」という暗いイメージを焼きつけられてきている。事実，この十年近くは，造船業では人員整理に明けくれ，折角造船に夢を持って会社に入って行った人々も，その職を去らざるを得ない場合が多かった。この暗いイメージをなんとか拭い去らねばならない時期にやってきているように思えた。いや，今拭い去らねば，若い人々から完全にそっぽを向かれ，日本の造船業は確実に衰退していかざるをえなくなる。

こうしたせっぱつまった状況の中で，最近の客船ブームは，海運，造船の明るい一面を人々に見せる絶好の材料のように思う。その客船をテーマにして，一隻の船が日本の造船技術を駆使して作りあげられていく過程を，一般の人々に知ってもらうことは大変重要な仕事であろう。

こういうことで， この企画の構成案作りと文章の執筆を引き受けることにし，早速作業にかか

った。イラストは船のイラストでは定評のある谷井建三さんが引き受けてくれることとなった。造船所や船主には，いろいろ無理をいって，資料や写真を提供して頂いた。それをベースに谷井さんが精密なイラストを書いていく。この作業は，当初予想していた以上に大変な作業となった。建造過程，船の機能，運航に至るまでわかってもらうためには，何と100枚以上のイラストが必要となったのである。高森編集長の叱咤激励と，厳しい監督？のもと，谷井氏はなんと4ケ月以上もこのイラスト作成に専念せざるを得なくなった。

文章を担当した筆者も，頭を悩ますこととなる。大学の講義ノートのような調子で書いた最初の原稿は，全くボツで，初めて書く素人向きの表現の難しさに直面してしまった。かなりの部分は，高森氏が筆者の原稿をベースに書き直し，さらにそれを筆者が再考するといったプロセスを取った。さらに，造船所の方々や船主の方々も，原稿やイラストのチェックを大変熱心にして下さった。

当初，4月のふじ丸の完成に合わせて本も完成する予定であったが，作業はだいぶ遅れて，校正に入ったのは6月下旬。そして，7月の海の記念日に合わせて，ついに店頭に並べられることとなった。筆者にとっても，イラストレーターの谷井さんにとっても，そして編集者の高森さんにとっても，ようやくひと仕事やり終えたという感激があった。高森氏は，この本の完成とほぼ同時に，定年で出版社を退職した。これが，同氏のプロの編集者としての最後の仕事であったわけである。一度ふじ丸に乗ってみたいという言葉が，この本への同氏の愛着を感じさせる。

この本がでてから，本屋に行くたびにこの本を捜すが，意外に目につかない。船の本をいく冊か出している谷井さんが，「船の本はあまり売れないから」と言っていたのが，ちらっと頭をよぎる。しかし，これも杞憂に終わった。発売から1ケ月半ほどして，出版社から，売れ行きもよく重版が近く決まりそうだ，という手紙をもらったのである。どうにか，当初の筆者の願いどおり，多くの人々に「船」の夢を売るという目的は多少達せられたようだ。

谷井建三さんのふじ丸のイラスト